

小学校低学年における投能力向上のための指導プログラムに関する検討

ー小学2年生を検討の対象にしてー

学校体育マネジメントコース

5008A324-4 豊田直親

研究指導教員： 友添秀則教授

1. はじめに

今回改訂された小学校学習指導要領(文部科学省,2008)では、幼児教育との円滑な接続を図ることや体力低下、積極的に運動する児童とそうでない児童の二極化への指摘や各学年の系統性を踏まえ、運動領域の改善が行われた。

文部科学省が実施している新体力テスト(文部科学省,2007)の結果から見ても児童の体力の低下が分かる。中でも投能力(オーバーハンスロー)の低下が顕著である。

筆者は現在、東京都葛飾区の小学校で2年生の担任をする立場であるが、投能力において明らかに未習熟の児童がいると感じる。また、全学年において、ドッジボールや野球をする姿をあまり見かけない。

低い投能力は、学校体育や社会体育におけるスポーツ活動を展開していく上で障害となっていると、生涯スポーツの実践への障害になっているのではないだろうか。なぜなら、低い投能力は、投運動を含むスポーツへの参加に少なからず影響を与えると考えるからである。小学校低学年は、遊びを通して自然と運動感覚を身に付けられる時期であり、この時期に投能力を高めておくことは、その後の児童の投運動を含むスポーツへの参加に影響を与えるのではないかと考えた。

そこで筆者は、小学校低学年児童における投能力向上のための指導プログラムを考案し、その有効性を検討した。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、我が国の小学生の投能力低下の現状をふまえ、小学校低学年における投能力向上のための指導プログラムを考案し、その有効性を検討することである。

3. 本研究の方法

本研究は以下のように進めた。

第1章では、投能力向上に関する先行研究の批判的検討を行い、投能力向上には、投動作の習熟と投運動学習経験を積むことが大切だと考えた。

第2章では、投動作の習熟と豊富な投運動学習経験を積むことができるであろう4つの教材(紙鉄砲、ペットボトル投げ、玉投げ、ネット玉投げ)を用いて、小学校低学年の投能力向上のための指導プログラムを考案、設計した。

第3章では、第2章で考案、設計した指導プログラムを適用し、その有効性について検討した。第3章で行った実験の概要は以下の通りである。

(実験の概要)

(1) 被検者

東京都葛飾区立A小学校に在籍する第2年児童43名(男子17名、女子26名)を対象とした。

(2) 投距離の測定

本実験では、指導プログラム前後での被検者の投能力の変化を測る指標として、文部科学省が実施している新体力テストのソフトボール投げを行った。

測定期日

第1回測定 10月22日

第2回測定 12月4日

(3) 撮影方法

三洋電機社製(DMX-CG9 MPEG-4 AVC1H 264方式 VGAサイズ 60fムービー)のデジタルムービーカメラを被検者の側方に設置し、指導プログラム前後のソフトボール投げの投動作と授業の撮影を行った。ソフトボール投げの撮影では、被検者の右側から10mの位置にビデオカメラを設置した。

(4) 投動作の評価

本研究では、投動作の評価に高本ら(2004)の作成した観察的動作評価法を用いた。

(5) 分析方法

学習前後における遠投距離および投動作得点の平均値の差をみるため、paired t-test(一对の標本によるt検定)を行った。なお、有意水準は 5%未満とした。

(6) 指導プログラム

- 1) 4 つの教材(紙鉄砲、ペットボトル投げ、玉投げ、ネット玉投げ)を用いて、「ボール投げ」の授業単元として 7 時間扱いで体育の授業を行った。
- 2) 「朝の会」または「帰りの会」を利用して、紙鉄砲を計 130 分間行った。

4 .結果および考察

本研究で得られた主な結果は以下の通りである。

- 1) 男女いずれにおいても有意な遠投距離の向上が認められた($p<0.01$)。
- 2) 男子において、投動作に有意な改善が認められた($p<0.001$)。各投動作別に比較すると、バッグスウィング時体幹後傾($p<0.01$)、フォロースロー

($p<0.01$)、足の踏み出し($p<0.01$)、で有意な完全が認められた。しかし、投げ手腕、体重移動、体幹の回転、投げ手反対側(非投球腕)では有意な改善は認められず、特に投げ手反対側(非投球腕)に課題が残った。

- 3) 女子においては投動作に有意な改善が認められた($p<0.001$)。各投動作別に比較しても、7 項目すべてで有意な改善が認められた。

以上のことから、小学 2 年生の男子児童、女子児童には投動作の学習効果があること、本研究で考案した指導プログラムは、一部に改善の余地はあるものの、全体的には投能力を向上させることが確認できた。今回は 2 年生の男子児童、女子児童を対象に実験を行ったが、考案した指導プログラムは、1 年生を対象に行っても投能力を向上させる可能性を含んだものであると推測する。

よって、本研究で考案した指導プログラムは低学年児童の投能力を向上させるのに有効性の高いものであると判断できる。